

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 【コラム】鳥への変身と死者の魂-グリム童話を考える?-

著者	大野 寿子
著者別名	ONO Hisako, OHNO Hisako
雑誌名	東洋通信
巻	48
号	12
ページ	4-8
発行年	2012
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00010966/">http://id.nii.ac.jp/1060/00010966/</a>

# オアシス

## 鳥への変身と死者の魂

―グリム童話を考える⑦―



大野 寿子

はじめに

グリム兄弟が収集刊行した『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(Kinder-und Hausmärchen、以下KHMあるいは『グリム童話』と略記)第一三番(KHM13)には、「森の中の三人の小人」という話が収録されている。<sup>②</sup>前半は、美しい継娘(主人公)が継母の命令で冬の森へ苺摘みに行かされ、その森の中で三人の小人(Haulemännchen)の住む家にたどり着き、小人に親切に接したことで、口から飛び出す金貨や国王との結婚といった幸運を彼らから授けられる話である。ちなみに、小人の家にたどり着いた継母の醜い実娘の方は、小人たちに不親切だったため、口から飛び出す蛙や不幸な運命などが授けられることとなる。ここまでは、KHM24「ホレおばさん」の、黄金の雨を受ける継娘とピッチ(コールタール)の雨を受ける実娘の話と

大変よく似ている。<sup>③</sup>後半では、国王に見初められ妻となり男子を産んだ継娘が、嫉妬にかられた継母とその醜い娘に殺されてしまい、その醜い娘(姉か妹かは定かではない)が継娘(＝王妃)とすり替わる。最初は騙されてしまう国王だが、殺された妃が鴨の姿になって現われることを聞きつけ、妃を元の姿にもどし、継母とその実娘を処罰するという内容であり、KHM11「兄妹」の後半部分にも酷似した展開である。

森で小人という不思議な生き物と接触し、運命が決定される前半のエピソードもさることながら、死者が鳥(鴨)の姿となって出現し、最終的には再生するという後半のエピソードには、特に、古代ゲルマンの他界観(あるいは異界観)を垣間見ることがができる。以下、兄ヤーコプ・グリムの記した神話研究書『ドイツ神話学』(Deutsche Mythologie, 1835、以下DMと略記)をてがかりに、『グリム童話』の古層に流れる、古代ゲルマンの

死生観を考える。

## 一、冥府訪問譚

スイスの伝承文学研究者マックス・リュートイは、「地下世界」、「天上世界」、「遠方世界」のいずれも、あちら側の世界＝異界のバリエーションであり、メルヒエンの主人公は、あちら側を旅した後、それが元の家であれ、配偶者の国であれ、もとのこちら側つまり現世的世界へと帰還すると指摘する。「あちら側」(Jensets)とは本来、「彼岸」同様「死」でもってこの世＝「此岸」と分かれた「死者の世界」、すなわち、一度行ったらもう後戻り出来ない世界のはずである。ところがメルヒエンの主人公は、そのあちら側の世界からさまざまな艱難辛苦を乗り越え帰還するため、彼らを、一定期間あちら側(＝死者の世界あるいは冥府)を旅した者、つまり「一時的な死を体験した生者」と見なしうる。

さて、ヤーコプ・グリム『ドイツ神話学』では、キリスト教改宗後の世界観とそれ以前の古い、神話的(あるいは自然信仰的、異教的)世界観を区別し、その異教的古代における死生観について、死に行く者は、自分の誕生の際に抜け出た神の懷へ、子どもは父の懷へ回帰する表象を持つという(DM2, S.700)。異教徒にとってもキリスト教徒にとっても「死ぬ」とは、神の御許へ赴く、神の安息と平穩へと入ると称されるものであり、「埋葬される」とはまた、母の懷へ落ちる、母と父が自分たちの

子どもを抱き上げると表現されることが指摘されている(DM2, S.700)。このような慣用表現あるいは詩的表現の中に、想起すべき祖先たちの異教的古代が残存していると、ヤーコプ・グリムは考えている。

## 二、肉体を抜け出る魂のかたち

『ドイツ神話学』によれば、死によって「肉体という鎖から解放された魂」が、「軽やかで精霊のような存在」に似ており、よく「ある特定の姿をとり、その形姿に魂は一定期間留まることを強いられる」という。この「ある特定の姿」として、「二つの優美な形象」が例に挙げられている。それは、肉体から逃れ出る魂が「花となって咲く場合」と、「鳥として飛び立つ場合」とである(DM2, S.689)。特に後者の「魂(の化身)としての鳥」については、「死にかけた者の口から逃げ出す鳥」、すなわち、口から出てくる鳥の形をした魂の存在が指摘されている(DM2, S.691)。古い墓石によく鳩が刻み込まれているのはこのためであり、その鳩をキリスト教徒は、精神(精霊)とより緊密に関連付けていたという。また、古代ゲルマン人においては、「眠り」というものが「死」あるいは「一時的な死」と同一視されていたことから、魂の化身である鳥や動物が、眠っている間に口から抜け出るという話に繋がってゆくというのである。たとえば、グリム兄弟が同じく収集刊行した『ドイツ伝説集』(Deutsche Sagen, 1816-18) 第四二八番(第二版以降四三三

番)「眠る王」では、木陰で眠るフランク王グントラムの口から、小さな動物が蛇のように身をくねらせて這い出すのを、近くにいる家来が目撃する。その動物が王の口の中に戻ると王が目覚めるのだが、その動物が外で経験したことを、王は夢で見ているのである。また、死ぬと口からネズミが飛び出すモテーフは、ドイツ文学の伝統のなかでは、ゲーテの『ファウスト』第一部「ヴァルプルギスの夜」で、ファウストと踊っていた魔女の口から、赤い鼠が飛び出す描写に見ることができる。眠っている魔女の口から赤い鼠が飛び出すという言い伝えに基づくものと思われる。

### 三、死者の化身としての鳥

さて、死後鳥になるというモテーフは、KHM13「森の中の三人の小人」のほかにも、KHM11「兄妹」にも表れることは先にも述べた。悪い魔女である継母から森の中へと逃れた兄妹の兄は、魔法にかかった泉の水を飲んで鹿の姿となる。妹がそのそばで世話をしていたところ、狩りにきた王に見初められて結婚し子どもをもうけるが、継母の策略により殺され、死後鳥の姿をとって現れるのである。同様のモテーフは、KHM135「黒い花嫁白い花嫁」にも見受けられる。『ドイツ迷信辞典』によれば、鴨とは元来魔女につき従う動物とされ、死者の生まれ変わりであるとも信じられていたという<sup>7)</sup>。さらに『メルヒェン百科辞典』には、「死者の灰から蘇生した魂の鳥として、ときおりバ

ルト海沿岸のメルヒェンに鴨が登場し、自分を探す兄に、魔法を使う継母に自分が殺害されたことを暴露する」ことが指摘されている<sup>8)</sup>(ATU452c「鴨としての姉妹」型)。また、ヤーコプ・グリムは『ドイツ神話学』において、鴨だけでなく幾種類かの鳥名を挙げつつ、人は死後鳥の姿に生まれ変わるという古代ドイツ(ゲルマン)での信仰の存在を指摘している(DM2, S.691)。この「人は死後鳥になる」という民間信仰の名残が、KHM13などの死後鴨の姿で現れるというモテーフに継承されていることを、グリム兄弟は知っていたのである。そして、先のリュウティの解釈を借りれば、その鳥が、さまざまな試練や行爲を経て再び人間の姿を獲得し、こちら側の世界へといわば帰還するという冥府訪問譚の構造をも兼ね備えているのが、『グリム童話』の特性の一つといえよう。

おわりに―翼をもった魂―

『ドイツ神話学』には、異教のボヘミアの信仰として、「魂は鳥として死者の口から漂い出て、死体が焼かれるまでの間木々の上をさまよい、そうして魂は安寧を得る」という記述が見られる(DM2, S.691)。また、フィンランド人とリトアニア人は、天の川を「鳥たちの道」すなわち「魂の道」と呼ぶという(DM2, S.692)。さらにアラブでは、ある殺された者の血から嘆き悲しむ(訴える)鳥が生成し、その鳥が、死者のために復讐が成し遂げられるまで墓のまわりを飛ぶという。また、あるギリシャ

の民間伝承は、魂は翼を持った存在として出現すると伝える(DM2, S.692)。この化身あるいは変身という現象を考えるヒントとしてヤーコプ・グリムは、「蝶の方が鳥よりも理解しやすい」とも見なしている(DM2, S.692)。すなわち、「成虫が幼虫から変化するのには、魂が死体から変化し乖離するのと同じ」だからというのである。たとえばバスクの哀れな魂は、鬼火のような、妖精的な存在としての「蝶」になるのだそうだ(DM2, S.692)。ヤーコプ・グリムによる例示は限りなく続くのだが、羽根を持ち飛翔する存在であるという類縁性が、魂の化身たる蝶と鳥の間には見受けらる。特に蝶などの羽化現象という生命連続のプロセスを、死と再生のメタファーと見なしているところが興味深い。ここには、屍から脱皮して次の生を羽ばたいてほしいという、グリムの死者への再生の祈りのようなものが込められていたともいえるのではないだろうか。

【追記】本稿は、「アジア遊学〔特集：古代世界の靈魂観〕」二二八号(一四八一—一五九頁)に掲載された拙論「死者への祈りとしてのグリム童話—ヤーコプ・グリム『ドイツ神話学』をてがかりに—」(勉誠出版、二〇〇九年十二月一六日)の一部に加筆を施し、新たにまとめたものである。

# 【注】

(1) 兄ヤーコプ・グリム(一七八五—一八六三年)と、弟ヴィ

ルヘルム・グリム(一七八六—一八五九年)。

(2) この話は、アールネ／トンブソン／ウーター(頭文字をとりATUと略記)の『国際的な昔話のタイプ』(The Types of International Folktales)のATU403「白い花嫁と黒い花嫁」型に分類される、継子いじめの典型的な話の一つである。ATUとは、アンティ・アールネとステイス・トンブソンの話型分類AT(Anti Aarne u. Stith Thompson: The Types of the Folktales (FFC. 184). Helsinki 1964.)の「ハンス＝エルク・ウーター」による改訂版のことである。

(3) KHM24はATU480「親切な娘と不親切な娘」型の話である。

(4) Max Lüthi: Diesseits- und Jenseitswelt im Märchen. In: Jörgen Janning(Hrsg.): Die Welt im Märchen. Kassel 1984, S.14f.

(5) 拙書『黒い森のグリム—ドイツ的なフォークロア(普及版)』、郁文堂、二〇一〇年、七九頁参照のこと。

(6) 竹原威滋「グリム童話の中の伝承歌謡—『ねずみの話』をめぐって—」、日本歌謡学会編『日本歌謡研究』第四五号(二〇〇五年)、三三—五二頁参照のこと。

(7) Hanns Bächtold-Stäubli u. Eduard Hoffmann-Krayer (Hrsg.): Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Bd.2.(10 Bde.) (Nachdr. v. Originalausgabe 1927—42) Berlin/New York 1987, S.850f.

(8)

Kurt Ranke u. a. (Hrsg.): Enzyklopädie des Märchens.  
Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden  
Erzählforschung. Bd.4. Berlin/New York 1999, S.1ff.

— おおの ひろし・文学部准教授 —